

書」はない。明快な結論としてまとまらなくとも良い。教師と学生がめいめい持ち寄り、統合し、分析し、総合することによってのみ、美のさまざまな姿が広まり深まり、高まり明らかになっていくであろう。

他大学で同趣旨の試みの例があるかどうか調べて教えて下さる方があれば歓迎であ

る。不十分な本小論を修正補充していただけるのも、なお有難いと思う。しかも、何とんでも「美」に関する一般教育授業開講へ向けて叱咤激励ないし協力を申し出ていただけるならば、筆者にとり、また新たな「美」との出会いとなることは間違いない。
(1990年6月30日)

所感三題

村瀬裕也

1 少女よ 君の命のために遁走せよ

今年の3月、京都国立近代美術館で開催されていた国吉康雄の生誕100年記念展を観た。とはいっても、他の所用のついでに立ち寄ったまでであって、この展覧会のためにわざわざ京都まで出向いたわけではなかった。つまり国吉康雄はそれまでの私にとってそれほど馴染み深い画家ではなかったのである。

勿論この画家が、日本美術史というよりもむしろアメリカ美術史のなかに確固たる位置を占める声価の高い画家であること、1930年代以降、政治的意識を高め、反戦・反ファシズムの活動に献身した進歩的美術家であることくらいは知識はもっていた。しかしそのような生涯に対する尊敬と、その作品に対する印象とは私の内部でしっかりと結びついてはいなかった。もっとも「その作品に対する印象」などと偉そうなことをいっても、それまで私が実物を観た彼の作品といえ、あの有名な横臥した女性像くらいで、パスキンやキスリングと類縁の、しかしエコール・ド・パリ風の優雅さを欠

いた、妙に生々しい頹廢のリアリティをもつその女性像は、いささかアクの強い背景の色調と相俟って、私の繊弱な感性には快い感応を呼び起こさなかったのである。

だがそのような食わず嫌いの偏見は、この展覧会を観るに及んでひとたまりもなく瓦解した。その生涯を通じてこれほど多彩な作風を試み、しかもその変遷を通じてこれほど思索的な探究の姿勢を一貫させ得た画家はそう多くはないであろう。初期のやや甘味なメルヘン調の幻想、デフォルメされた牛のおおらかでユーモラスなイメージ、アンリ・ルソオ風に稚拙化した屈託のない人物、大恐慌期の民衆の苦悩を体現した女性達、ベン・シャーン風の寂寥感の漂う風景と人物、そして晩年を飾る一種狂気じみた原色と奇怪なイメージの乱舞、——そうした様々の主題が、意識的・方法的な探究に貫かれて、段階ごとにそれぞれ充実した内容を形成しているのだ。私がかつては余り好きではなかった女性像も、こうした流れに位置づけて観ると、単なる頹廢への耽溺ではなく、ぎりぎりの状況にお

かれてもお譲渡することのできない人間の尊厳へのヒューマニスティックな共感の表出であることが納得される。

私をもっとも興味を惹かれたのは、ベン・シャーン風の、しかしベン・シャーンよりは遙かに思弁的な寓意性の顕著な1940年代の一群の作品である。小文に標題を借りた「少女よ、君の命のために遁走せよ(Little Girl Run for Your Life)」はそうした作品群のひとつである。暗く垂れ籠め、侘しい嗚咽のような風の音の聞こえてきそうな空のもと、遠方に僅かの廃屋と電柱しか見えない荒涼たる風景の手前で、巨大な蝗と蟻螂が、戦車と高射砲のような凶悪な構えで争っている。その向こうには、この争いを擦り抜けて逃れたのであろう、ひとりの少女が、救いを求めるように両手を上げ、白いスカートを靡かせながら遙かな地平線に向かって走って行く。これを描いている画家は——従ってこの絵に臨む鑑賞者も——、遁走する少女の背後から必死で声援を送る恰好になる。「少女よ、戦争や殺戮は大人達の愚行で、君には何の責任もない、この際何よりも大切なのは君自身の命だ、構うことはない、この愚行の場から遁走せよ、あの地平線の彼方で、かけがえない君の命を育め。」平和と人道の使徒、反戦・反ファシズムの旗手であったこの画家の痛切な声が響いてくる。

断っておくが、私はこの作品がこの時期の国吉の作品群を代表するに足る特別の傑作だと思っているわけではない。純粹に芸術的な意味においてならば、「救済」「安眠を妨げる夢」「祭りは終わった」「ここは私の遊び場」などの作品にほぼ高い評価が与えられよう。にも拘らず私がこの作品から強い印象を受けたのは、教育界の末席を

汚している私自身が、国吉康雄と同様、最近特に子供達に遁走を呼びかけたい心境にあるからである。というのは——、巨大な利潤機構のもとで、そこに巻き込まれた人々が鎬を削っている今日の社会状況は、常識的な意味では戦争状態とはいえないにしても、人間存在の理法に係わる言葉の深き意味において、やはりひとつの「比喩」としての戦争状態に該当することは間違いないであろう。その証拠に「企業戦士」などという嫌な言葉が、戦時中の戦士に対すると同様の賛美をこめて堂々と罷り通っているのではないか。そしてこの種の大人達の愚行を支配している原理こそ、「競争原理」という極めて悪質な原理にほかならない。「子供達よ、君達はこんな大人達の愚行にも、『競争原理』などという愚劣な原理の発明にも、何の責任もない、そんなことに巻き込まれる必要はない、この際重要なのは、君達自身の命と人格の尊厳なのだ、構うことはない、遁走せよ、そして何れの日か、『競争』ならぬ『共同』の楽園を築け。」国吉康雄とともにそう叫びたくなる。だが如何せん、ここはアメリカではなく、日本であり、この狭隘な国土に遁走のための空隙は極めて乏しい。今や「競争原理」は、その発明に何の関わりもない子供達の成育の場に網を張り、締めつけを強めている。この期に及んで、子供達に自らの力による遁走を呼びかけても無駄であり、酷な要求でもあろう。この際、無情の網を切り裂き、子供達をそこから飛び出させるのは、あの愚劣な原理の発明と実行に責任のある我々大人達の仕事でなければならぬ。だが仕事にかかる前に我々自身が、蝗や蟻螂の姿を脱皮し、首の上にとっかりと「人間」の顔を据えておく必要がある。

2 灰色の心象風景に色彩を施せ

こんな駄文を綴っている間にも、わが巨大な蝗や蟻蜂の舎弟どもが跋扈をほしのままにしている情報に事欠かない。鹿児島某高校では、2人の女高生が、体育の時間に予定されていたハンド・ボールのための準備体操をしていた際、半袖の体育服の袖口をまくりあげていたというだけで、担当教諭から鉄拳で殴られ、そのうちの1人はさらに軽スポーツ室に連れ込まれて殴打され、重傷を負った。また神戸の某高校では、生徒指導担当の教諭が遅刻者を締め出す目的で、擦り抜けようとする生徒達に構わずに鉄製の校門を閉めようとしたところ、それまで一度も遅刻したことなかったパセド氏病の一女高生が鋼鉄の門扉と扉の間に挟まれて圧死した。そんな事件が世間の注目を惹くと、ジャーナリズムは思い出したように教育現場に群がり、それまで揉み消されていた体罰事件をあちこちから引っ張り出してくる。ジャーナリズムのはしゃぎぶりには別の危険を感じないわけではないが、しかしその気になれば事例の蒐集には困らないほど、我が国の教育界に暴力体質の裾野が広がってしまった事実こそ、この際は一層重視されるべきであろう。

しかし問題の根本はむしろこうした直接の暴力事件の恒常的な下地、すなわち「企業原理」の教育的反映たる「偏差値」=「競争」教育という、日本中に蔓延している野蛮な慣行、常態的な「構造的暴力」、人格の発達開花に対する普遍的・一般的な「暴力的」敵対にあるといえよう（ジャーナリズムのはしゃぎぶりに対する私の危惧は、それが常にこの根本から眼を逸らせる仕方では猟奇的に事件を扱う点にある）。ところで、小文の主題はこの「構造的暴力」に関連し

ているのだが、その苛烈な競争教育によって齎される学生の問題状況、発達上の疎外状況についてはこれまでも各方面において度々指摘されてきた。曰く、「問題意識の欠落」、曰く、「論理的思考力の弱さ」、曰く、「言語表現の断片化・片言化・幼児化」、曰く、「説得的説明能力の不足」、曰く、「主客未分の自己中心性」、等々。要するに昨今の学生は受験競争に勝ち抜くための膨大な断片的知識を詰め込まれているが、思考力はじめ、大学生に要求される学問探究のための基本的能力を欠如している、というのだ。ところが最近に至って、学童期以来ひたすら詰め込まれてきたはずの「断片的知識」でさえ、頗る怪しくなってきた。多くの学生にとって、コペルニクス、ケプラー、ダント、シェイクスピア、あるいは中江兆民、幸徳秋水といった名がすでに覚束なくなっており、先日「平和論」の授業の際には、受講生の殆どがトルストイやその作品『戦争と平和』を知らないことを発見して驚愕した。ドリルの解答に苦しみ、成績の順位に一喜一憂し、公文や能開や河合や駿台の繁盛に寄与してきた長期にわたる犠牲は、彼等にとって一体何を意味したのであろうか。

さて、今日ここで指摘したいのは、「構造的暴力」のもとでの発達疎外のいまひとつの側面、——私には知識上の欠落よりも一層重大だと思われるいまひとつの側面である。私は一般教育の多人数授業(例年350名前後)の期末試験には、講義の内容を単なる素材として用いつつ、それを巡っての各自の見解を論述せよ、という趣旨の問題を出している。優秀な答案を書く学生が毎年4~5人はいて日本の将来への希望を繋いでくれるのだが、残りの圧倒的多数の答案

を読むと、こんな問題は出すべきではなかったのかという疑問が湧き、憂鬱な気分に乗られる。そのうちの相当数は、自分の見解は述べず、講義の内容を要領よく纏める「優等生」型の答案で、これには残念ながら要領のよさの程度、あるいは表現技術の練達度に応じて然るべき評価を進展するほかはない。私の心をそれ以上に暗くするのは、特殊今目的といってよい特定傾向のパターンに嵌まった答案、——こちらの要望に応じて正直に自分の「意見」を開陳してくれるのはよいのだが、それが判で捺したような「オチ」に終わる答案の大群である。例えば「人間の自己疎外とその克服」という出題に対して次のような見解が述べられる。

「疎外克服の手段としては、自己のもつ人間性を全面に出し、他人と接する場、（例えば職場）で資^{リキ}極的に行動し、社交的にふるまい、自己をアピールすることが重要だと思う。」（1年男子）

「人間の類の本質とは……自分自身の生活活動を意欲の対象とした自由な意識的存在であるから、簡単にいえば疎外を克服するためにはなんのことはない、自分らしく生きればよいのである。しかしこの『自分らしく生きる』というのが昔に比べやりにくくなったのも事実であろう。種的に言えば犬のように自分自身の生活活動と本質が直接に一つであるのが望ましいのかも知れない。」（下線部分は講義で紹介したマルクスの言葉の変形、但しそれがこの文脈に無造作に挿入されているのを見ると、その意味は理解してもらえなかったらしい——1年男子）

「労働がこういった負の側面をもつことは現代の企業社会においては、いなめ

ない事実だから、それは人間にとってこえられない壁として、うけいれるだけの自分をつくるという形で克服していく他はないのではないか。」（1年女子）

全文を挙げれば思考の特徴は一層はつきりするのだが、残念ながら紙幅に余裕がない。なおこれらの文章はすべて合格点を与えた答案の一部であって、特別におかしな例を拾ったわけではない。ここに特徴的なのは、要するに社会問題としての「疎外」問題を個人問題に置き換え、客観的状况はどうしようもないから、それを認めた上で自分の方を何とかしなければならぬ、という発想である。非条理的な他律の枠組みのなかにおかれてきた彼等の成長過程を考慮すれば、これが極めて自然に身についた発想であることは想像に難くない。しかもやがて彼等を迎えるはずの現実社会についての彼等なりの「予感」がこれに加味されれば、自己尊厳の故の受苦と懊悩の伴う「自由な意識的活動」が却って煩わしく、自分とその生活活動とが「直接に一つ」であるような被規定性に呪縛された犬の生活にむしる理想を見出すのも、あながち無理とはいえないことかも知れない。

しかし私がここで強調したかったのは、この種の思考傾向や価値意識のもつ問題性——それについてはすでに多くの人々が語ってきた——についてではなく、こういう文章を何枚も読むうちに浮かび上がってくる何ともやりきれない索漠とした心象風景についてである。それは青年期特有の強い自我意識から発散される気負ったニヒリズムの投影ではなく、それ以外の状態を経験したことのない者が極く当たり前の所与として、何の銜もなく公開して見せる独特の光景である。そこには緑の柳も紅の花

も淵に躍る魚も彩りを添えず、文学や芸術の巨星達の至高の精神の光も射してこない、——そんな生気の乏しいどんよりとした灰色の光景である。私はこれまで人間の共感・共体験の可能性については、「感情移入説」のような無理な理論をデッチあげるまでもなく、人間存在の成立事情に本源的に由来する特質としてついぞ疑ったためしはないのだが、しかし最近に至って、こうした灰色の光景において営まれる感情生活への追体験の手立て——その感情生活を自らの体験において情緒的に了解する手立て——を見出せずに苛々している。しかしそこにどんよりとした灰色の光景が存在していることだけは確かである、——あの「構造的暴力」によって花を摘まれ、緑を枯らされてしまった光景が。

とすれば、ここに一般教育のひとつの課題が設定されるのではないであろうか。これまで一般教育の吃緊の任務として、人間である限りにおける人間としての普遍的な思考能力・価値識別力・社会的実践能力の陶冶が叫ばれてきた。私自身もその方向で微力を傾けてきたつもりである。しかしこのような陶冶を保証する陶冶性は、逆にむしろある意味において光彩陸離たる心象世界にこそ求められるのではないか。灰色の光景に絢爛の光を当て、豊潤の色彩を施すこと、——それは主題の明確な学問的陶冶と併せて、むしろかかる営為の前提条件を築くものとして、意図的に追求されなければならぬ課題ではないか。しかしそのために如何なる手段を講ずればよいのか？——その点になると、私自身なお暗中模索の最中であることを告白するほかはない。

3 比較のための一材料

こんなことを問題にしていると、やはり戦後の前半期と最近とにおける青少年の精神的発達状況の比較を試みたい衝動に駆られるのは避けられない。もっともその関心が単純な「世代論」に傾くとすれば、こうした比較は途端に厭味な性格を帯びてくるだろう。私自身、学生の頃、功成り名遂げた教授から「自分の学生時代はしかじかだった」というような自慢を聞かされると、やや神経過敏のコンプレックスも手伝って余りいい気持ちじゃなかったものである。しかし青少年の精神発達に介入する客観的教育条件の変化との係わりが問題になるとすれば、話はまったく別である。少なくとも教育関係者の間では、戦後民主主義の息吹がなお強く残存し、教育に大幅の自由度が認められていた時期と、そのような自由度が抑制され、「競争原理」が支配を逞しくしてきた時期とにおける青少年の精神発達状況の特徴について比較し確認することは、論議を進める上で決して無意味ではないだろう。

そういうわけで、何か比較材料はないかと探していた折、少なくとも私にとっては甚だ好都合な材料が手に入った。私の高等学校時代の旧友が、家のなかを整理していたらこんなものが出てきたという書状を添えて、私が高校1年生のときに発表した小作品のコピーを送ってくれたのである。ひとつはガリ刷りの大泉高校芸部誌『七葉樹』に掲載された「小船」と題する詩まがいのもの、もうひとつは『大泉高校新聞』（こちらは本格的な活版印刷）の学芸欄を麗々しく飾っている「野間宏の短編に就て」と題する評論まがいのものである。何れもそんなものを書いた記憶はあったが、内容はとうの昔に忘却の淵に沈んでいたので、

我ながら興味深かった。なおそれと併せて、上級生の新聞部員達の書いた政治問題や校内問題に関する記事が、近頃の大学生の書く文章に泥んだ眼から見ると、実に堂々たる大人の文章であるのに少なからず驚いた（断っておくが、当時の大泉高校は決して日比谷高校や西高校や戸山高校のような「東大合格」一流高ではなかった）。

さて、先ずは話のきっかけとして、「小船」なる詩まがいの——「まがいの」と断るのはおおよそ詩としての基本多件を欠如した代物だからである——作品を再録しよう（いささか滑稽な部分もあるが、15～6歳のガキが書いたものだから、容赦願いたい）。

思想はふるびた小船のように

はてもない濃霧の大海をさまよっている
のです

やるせなくかなしく

見透しもない懐疑の濃霧につつまれて
いつまでもわけもなくさまよっているの
です

否定と

虚無と

もやのような反逆心の沈滞する

肯定を知らず肯定をもとめて漂泊する貧
しい思想

ああそれは一筋の信念をもつことを知ら
ない

死と無の

悒鬱な恐怖の思念が苔のように這^(マ)った
虚腔の脳味噌には

社会への思想の炎はゆるれるのだが

労働者や

凡ゆる貧窮の虜となった人々について

惨たらしい戦火に虐げられた人々につい
て考えようとするのだが

泥沼の底のような暗澹たる社会を思うと
き

そこに死の恐怖のような絶望をみる
ああ一筋^{ソシアリズム コミ(ニズム)}に社会主義も共産主義も信じら
れず

もやのようにたちこめた疑念はさみしく
涙する

神経病みの稚い思想はふるびた小船のよ
うに

はてもない濃霧の大海をさまよっている
のです

操縦室にはこわれた羅針盤

途方もなくだだびろい濃霧の大海を

陸地を知らず陸地をもとめて

蒼穹のひろがる陸地をもとめて彷徨をつ
づけるのです

外見上の体裁には当時心酔していた萩原朔太郎の『青猫』期の作風の影響が認められるが、もとより朔太郎流の叙情性に欠け、単なる観念的思考のむきだしの表出に過ぎないから、これを一篇の「詩」と認めるにはいかにも無理があろう。しかもここには明白な嘘がある。すなわち、「ああ一筋に社会主義も共産主義も信じられず」と謳っているのがそれで、当時の私は原理原則としての社会主義や共産主義には相当の確信を抱いていたのである。にも拘らずこのように書いたのは、スターリンなる個人を権威の位置に祭り上げていた当時のソヴィエト社会への不信、時折参加した集会での東大生の活動家の紋切型の演説への反感、当時紹介されていたソヴィエトのやたらに引用句の多い権威主義的な哲学書や文芸論への違和感——なおソヴィエト哲学の名誉のために断っておけば、その頃はまだルビンシュタインやコプニンやトッガリノフのよ

うな魅力的な哲学者は日本に紹介されておらず、比較的御用哲学的な教程類が翻訳され、労働者や学生のサークルで用いられていた——、私の愛好していた耽美的・高踏派的・象徴主義的な文学や芸術に「ブルジョア的」とのレッテルを張りたがる文学サークルの先輩への不信などによるものだが、加えて、いかなる権威にも従わないという気負った個人主義の、幾分ひけらかし気味の表明だったのであろう。しかしそうした私的追憶を別にして見れば、ここにはひとつの興味深い特徴が発見される。すなわち、この高校生は、一方ではやや自意識過剰気味の自我に目覚めつつ、他方では、個人を越えた客観に係わりをもつ思想問題に直面しているのである。これはいうまでもなく「形式操作」期の発達特性を呻吟しつつ拡張しようとする際の背伸びをした姿勢にほかならない。

「野間宏の短編に就て」のほうにもほぼ類似の傾向が見出される。これは、社会的問題意識と併せて複雑に屈折した内面世界の掘り下げに新境地を開いた野間宏の初期短編を、小林多喜二、徳永直、宮本百合子、葉山嘉樹、アプトン・シンクレアなど正統的なプロレタリア文学と比較しつつ論じたものだが、面白いのは、「良心的インテリゲンチヤの立場からプロレタリアートへの自己変革」について述べた件りで、どうやら自分自身をインテリゲンチヤの一員に加えているらしいふしが窺われることである。たかが15~6歳のガキが自らインテリゲンチヤを以て任じ、プロレタリアートへの自己変革を真顔で問題にしているのは笑わせるが、しかしこれも「形式操作」期の発達特性の拡張に伴う背伸びと受け取れば別段不思議はない。問題なのはこうした「背伸

び」がどんな状況で許されたのかということである。

それについて頗る示唆的な記事がやはりこの『大泉高校新聞』に載っていた。一般社会班（いわゆる「社研」）有志による「松川事件を究明する会」の活動と、文芸部・一般社会班共催による柁木恭介（当時明治大学助教授であったフランス文学者）・真鍋呉夫（作家）両氏の講演会について報じた記事の最後に、その講演会のあと、柁木・真鍋両氏を囲む座談会が校長室で開かれたという事実が伝えられているのである。当時の私はこのほうの活動にも参加しており、特に真鍋氏には個人的にも親しくして貰っていたから、この記事を見てその時の記憶が鮮明に蘇った。その座談会には、校長室が提供されただけでなく、当の校長先生自身も参加されていたことは確かである。昨今ならば、自分の学校の生徒がこんな社会活動——私自身は校内の「究明する会」だけでなく、市民組織である「松川事件被告救援会」の活動にも参加し、いわば校内組織と外部組織との連絡役を務めていた——に従事していることを聞いただけでも卒倒する校長が少なくないであろう。松川事件そのものは陰惨な謀略的冤罪事件であり、それもまた当時の社会の一面を物語るが、少なくとも学園のなかには、正義に燃えた生徒達の活動に校長自ら便宜を提供するというおおらかな雰囲気があったのである。当時の高校生達は近頃には比べればよほど紳士淑女を以て待遇されていたといえよう。勿論つまらぬ規則違反に対して校庭を走らされたり腕立て伏せをさせられたり体罰を加えられたりするような人格的侮辱を伴う罰則が科せられるなど夢想さえたことはなかったし、況して校門の門扉で

圧殺される心配などさらさらなかった。そうした状況のなかでこそ、彼等は大いに背伸びをし、苦悩し、自己達成の喜びを味わうことができたのである。

私は何も「昔は良かった」という話をしているのではない。「形式操作」期の発達が見合った内実を伴うには、やはりそれ相応の教育的条件が保証されなければならないということを、過去の実例を示しつつ指摘したままである。要は、大学入学前に、その発達段階に相応しい適切な「背伸び」をしておいて貰わなければ、大学入学後に今一段の「背伸び」を要求することは極めて困難だということである。もとより雁字搦めの体制のなかですでに萎縮してしまった大勢の学生を引き受けている以上、大学が、特に一般教育が、対症療法的な人間回復教育の責を負わなければならぬことは当然だが、だからといって問題の根本的解決が大学の力だけで可能であるという妙な自信過剰——あるいはそれがかなわぬ場合には妙な贖罪意識——に陥ることも禁物であろう。「競争教育」の最終結果を最も痛切に知る立場にある我々が、その実態を社会的に訴え、他段階・他領域の教育関係者との問題解決——というよりもむしろ端的には教育界における「常識」の回復——のための連携を強めるべき退却引きならぬ現況に直面しているのである。

——この文章を書いている恰もこの折、期末試験が終わってから間もない日曜だというのに、複数の公立高校では2年生以上の生徒に「実力テスト」が実施され、某私立高校では「模擬テスト」が行われている。某公立高校では夏休みに入ってから暫くは補習授業が続き、某私立高校では盆の休暇を挟んで1週間ほどしか夏休みが与えら

れないという。嗚呼！嗟吁！——思春期の「自我」は何時「美わしき惑い」に悩みつつ背伸びをすればよいのか！